金が最初1573年に中瀬の八木川で発見された。それに続いて鉱山が発見され，1633年までに町はおよそ3,000世帯と8つの寺院ができるまでふくれあがっていた。中瀬は政府にとって非常に重要な収入源であったので城下町と同じくらい厳重に警備され，3カ所の門で出入りする通行の制御をしていた。アンチモンが後に発見され，中瀬鉱山はやがて日本で最大のアンチモン鉱石の資源地となった。

1969年までに，アンチモンは採掘し続けるよりも生の鉱石を輸入する方が安くなってしまっていて，鉱山は閉鎖した。中瀬の人口は急激に減少した。江戸時代（1603-1867）の8つの寺院のうち5つが現存するが，人の住んでいる家はわずか82軒くらいしかない。しかしながら，アンチモンの精製は続き，今日の国内でのアンチモン製品の7割がまだ中瀬で作られている。

中瀬鉱山で採られたいくつかの美しい金属のサンプルが観光案内所に展示されている。見つけられた最も美しいものの一つは626グラムある石英と融合した自然金で，首都ワシントンのスミソニアン博物館に展示されている。